

第2編 安芸高田市の歴史

第1章 原始・古代の安芸高田

- 1 旧石器時代・縄文時代の遺跡
- 2 弥生時代の遺跡
- 3 古墳時代の遺跡
- 4 高田郡の成立
- 5 仏教が国家の政治にはたした役割
- 6 安芸高田市の主な古墳・古代遺跡分布図

第2章 武士の成長と安芸高田

～平安時代末期から鎌倉時代～

- 1 中世高田郡・高宮郡の成立
- 2 高田郡・高宮郡内に成立した
荘園・国衙領
- 3 中世への転換の中で
- 4 平氏政権と厳島神社と安芸国衙の関係
- 5 高田郡司藤原氏の動き
- 6 在地領主高田郡司藤原氏の没落と
源平の争乱
- 7 土着の領主と東国武士
- 8 安芸高田に移った武士たち
- 9 毛利氏の吉田への移住

第3章 武士の成長と安芸高田

～南北朝時代から戦国時代～

- 1 南北朝の動乱期から室町期に
おける毛利氏の動き
- 2 安芸国人一揆の形成
- 3 毛利元就の登場
- 4 国人領主から戦国大名へ
- 5 毛利氏の課題
- 6 中世安芸高田の信仰

第4章 幕藩体制の時代

- 1 関ヶ原の戦い
 - 2 徳川政権と安芸高田
 - 3 近世農民の生活
 - 4 農村文化の発展
- コラム
5 幕末と安芸高田
コラム

第5章 近代の進展と安芸高田

- 1 廃藩置県と武一騒動
 - 2 明治の地方行政の成立と安芸高田
 - 3 近代学校教育の始まり
 - 4 日清・日露戦争の頃の安芸高田
 - 5 大正時代 芸備鉄道開通に伴う変化
 - 6 日中戦争・太平洋戦争下の安芸高田
 - 7 戦時下の安芸高田の場面
- コラム① 和算の研究 三上義夫
コラム② 衆議院議員 名川侃市

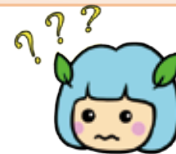
第6章 現代の安芸高田

- 1 戦後の復興と高度経済成長
- 2 酪農開拓パイロット事業
(高宮町羽佐竹)
- 3 土師ダムの建設 (八千代町土師)
- 4 中国縦貫自動車道の建設
- 5 昭和38年豪雪災害・47年豪雨災害
- 6 アジア競技大会広島大会・
第51回国民体育大会
(ひろしま国体)

第1章 原始・古代の安芸高田

1 旧石器時代・縄文時代の遺跡

●いつごろから、安芸高田には人が住み始めたのでしょうか？



安芸高田でも旧石器時代から人は住んでいました。
各地に遺跡が残っています。

教科書や資料集で見たことあるね！

安芸高田市で一番古い遺物が右の石器です。旧石器時代の後半期（約2万～1万2000年前）といわれています。

吉田町の郡山大通院谷遺跡で見つかった物で市内で唯一の旧石器です。石器は、角錐状石器とよばれるもので、石を打って、三角錐状に加工し、柄の先につけて槍先として使ったと考えられています。

旧石器時代にすでに安芸高田に人が暮らしていたことになります。



↑ 郡山大通院谷遺跡出土角錐状石器

2 弥生時代の遺跡

●弥生時代の遺跡には、どんなものが見つかっているのでしょうか？

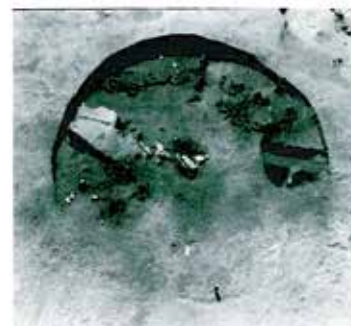


教科書に登場するような石包丁や磨製石斧など当時の生活で使用されたものが発見されています。

弥生時代は、日本人が米を主食としはじめる時代です。約2300年前ごろから大陸から伝わった稲作に関わる技術や道具などが全国に広まりました。安芸高田でも、教科書に登場するような弥生土器などが多く発見されています。

向原町坂や甲田町下小原をはじめ各地で土器や壺、郡山大通院谷遺跡でも、石包丁や磨製石斧など当時の生活で使用されたものが発見されています。

みなさんの住んでいる町も、^{たてあな} 竪穴住居が広がっていたのかもしれない。



↑ 植谷遺跡（高宮町）
弥生時代住居跡
安芸高田市歴史民俗博物館



安芸高田市にも弥生時代の遺跡があります。

■貴重な遺跡 安芸高田市で発見！！

四隅突出型墳丘墓

●なぜ、四隅突出型墳丘墓の発見が貴重なのでしょうか？



珍しい弥生時代の墓の一種！ 広島県内で10例しかない貴重な遺跡！

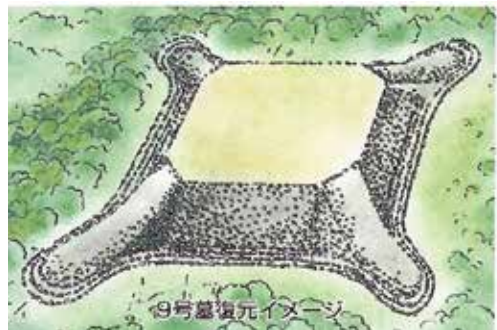
平成25年5月、吉田町下入江・^{いなやま}稲山という山でたいへんめずらしい弥生時代の墓が見つかりました。土を盛った四角い墳丘^{ふんきゅう}の角（隅）が飛び出すような形の墓は、全国で100以上見つかっていますが、その多くは山陰地方と広島県北部にあります。今回の稲山墳丘墓は、県内で10遺跡目、安芸高田市では初めての発見です。



^{いなやま ぶんぼ} 稲山墳墓 (四隅突出型墳丘墓)
^{よすみ とっしゅつかたふんきゅうぼ}

- ・ 全景(赤線が墳丘の外形)
- ・ 墳丘約10m×9m
- ・ 突出部含めた最大幅約15m墳丘高さ約1.5m
- ・ 北西隅の突出部付近 突出部幅・長さ各約2.6m

四隅突出型墳丘墓イメージ図 →
(出雲市史跡ガイドより)





● 林道入江戸島開設工事に伴う発掘調査を行った（公財）安芸高田市地域振興事業団の沖田健太郎さんに聞きました！

Q： 見つかった「四隅突出型墳丘墓」が注目されているのはなぜですか。

A： 珍しい弥生時代の墓の一種で、市内初、県内では10遺跡目となる数少ないものです。

県内では三次・庄原市と北広島町の間地域を埋める発見です。全国的には百例程度が知られ、広島県北と山陰に集中し、一部北陸地方にも見つかっています。この型の墓の地域性や移り変りを考えるうえでたいへん注目されているのです。

Q： この墓の特徴は何ですか。

A： まず土を盛ったり削ったりして墳丘を平面が方形や長方形の形に造り、その角が飛び出す（突出する）ような形としています。斜面に石を貼り、墳丘の裾に石を並べたり、石を使ったりしていることも特徴です。

Q： 誰の墓ですか。

A： この稲山墳墓の場合は見晴らしのよい尾根の先端に造られていますので、おそらく墓から見える範囲に勢力を持っていたこの地域の首長が葬られたと考えています。

Q： 甲田町にある甲立古墳との違いは何ですか。

A： 四隅突出型は弥生時代の広島県や山陰地方を中心にみられるものですが、甲立古墳はおよそ百年後の古墳時代に造られた前方後円墳という、定型化した全国にみられる墳形です。四隅突出型が前方後円墳の前身であったという説もあります。

これからどうなる？

安芸高田市教育委員会では、貴重な遺跡であることから、林道建設を行っている市農林水産課と協議し現状保存することとしました。市や県の史跡に指定するくらいの価値の高い遺跡と考えています。

3 古墳時代の遺跡



●安芸高田にはどんな古墳があるのでしょうか？

安芸高田にはいくつもの古墳があります。そのほとんどは、長い月日をかけて、森になったりしています。そのなかでも、甲田町の甲立古墳は広島県内でも有名な古墳です。

甲立古墳

甲立古墳は、甲田町上甲立にあるきくやま菊山の尾根に作られています。江の川と本村川が合流し、古くから人々の交流があった地域にあります。今から1650年くらい前に作られました。発見された埴輪はにわの形から推定できます。古墳は、前方後円墳とよばれるもので、安芸高田市内でも2つしか発見されていません。大きさは広島県内第2位の大きさ（縦の長さ約77m）です。

しかし、甲立古墳が作られた時代4世紀後半では、県内で一番大きかったとみられます。古墳は、教科書でも学習したとおり各地の豪族墓です。ということは、安芸地方（現在の広島県西部）を支配していた豪族がいたということでもあり、この古墳があった時代には安芸の中心地は甲立周辺であったとも考えられます。

古墳は、時間が経つごとに、崩れたり盗掘などの被害にあったりすることが多いですが、甲立古墳は残存状態がきわめてよく、特に埋葬されている後円部には、埴輪が当時並べたときの状態で残っていました。中でも、家形埴輪が5基並んだ状態で見つかり、これは国内でもきわめて稀な例として注目されています。

また、甲立古墳がヤマト王権時代に畿内で見られる巨大古墳とよく似た構造になったこともわかっています。甲立古墳を造るとき、ヤマト王権が何らかのかたちで直接関わっていたことが考えられます。



↑ 甲立古墳出土の
家形埴輪



↑ 甲立古墳出土の
朝顔形円筒埴輪

甲立古墳を発掘した安芸高田市教育委員会職員の話

「以前からあった甲立古墳でしたが、実際に調べてみると、とても貴重なことがわかりました。古墳は平成22年から4年間調べました。県内でも初めてとなる発見もあり、いろいろなことがわかりました。当時の人々がどうやって古墳をつくり、どんな生活をしてきたのかなどを想像しながら調査しました。どうも、ヤマト王権とのつながりがみえてきたので、重要な人物の墓だということがわかりだしました。みなさんも是非見る機会があれば来てくださいね。」

4 高田郡の成立

●安芸高田の前身，高田郡はいつできたのでしょうか？

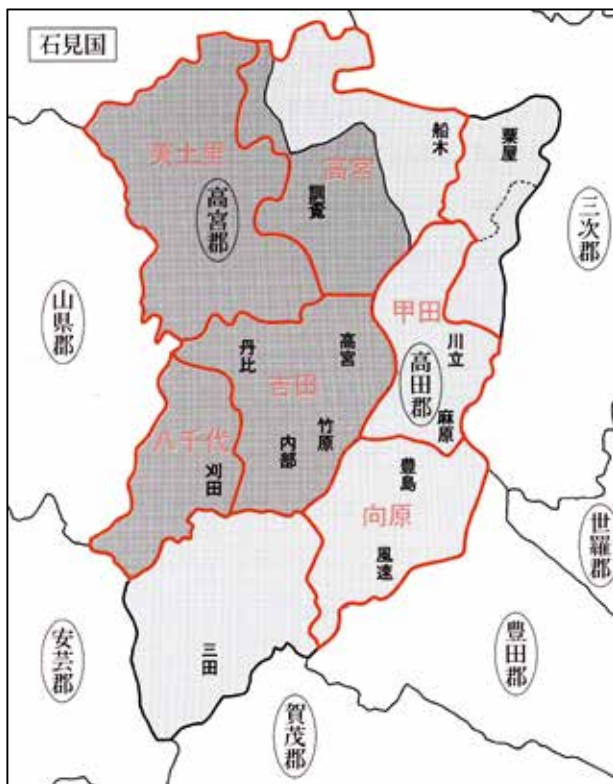


平安時代の記録には，すでに高田郡・高宮郡といった現在にちなむ地名があったとされています。いまの安芸高田市の原型は鎌倉時代の高田郡にあると考えられます。

6世紀の終わりごろ，朝廷が奈良県明日香村あたりの飛鳥地方に移されました。そこから，710年の奈良時代平城京遷都までを飛鳥時代といいます。聖徳太子による十七条の憲法の制定などが行なわれて，701年の大宝律令の制定など天皇を中心とする中央集権国家の確立がめざされました。地方も朝廷から，国郡里制をしかれました。(奈良時代には，郡の下に郷，郷の下に里がおかれました。)

広島県は，安芸国となり，その下に，高田郡・高宮郡がおかれました。平安時代に成立したとされる事典の『和名類聚抄』によると，現在の安芸高田市吉田町・八千代町・美土里町・高宮町などは，古代の高宮郡の領域であったとされています。全部で6つの郷があったといわれています。

高田郡は，現在の安芸高田市北西部などで，後に高宮郡と併合をされ，南北朝時代頃には，現在の市域とほぼ同じ高田郡になりました。郡の中心には，郡衙といわれる郡の役所が置かれ，朝廷からの役人が派遣されました。高宮郡衙は高宮郷（現吉田町吉田）の郡山周辺にあったとみられます。郡山大通院谷遺跡（吉田町）では，郡衙施設の一部とみられる掘立柱が見つかっています。また，郡山城下町遺跡からも「高宮郡司解・・・」と記す木簡が出土しています。



現在の安芸高田
市と違うの
は，どんなと
ころだろう？話
合ってみよう。



← 古代郡郷推定一図
『安芸高田郡の文化財』より
太線内部が南北朝時代以降の高田郡域

5 仏教が国家の政治に果たした役割

● 安芸高田市に仏教の影響が及んだのはいつごろで しょうか？

古代では、東大寺の大仏にみられるように、仏教は国家宗教として広められました。安芸高田でも、仏教にちなむ遺跡が残っています。

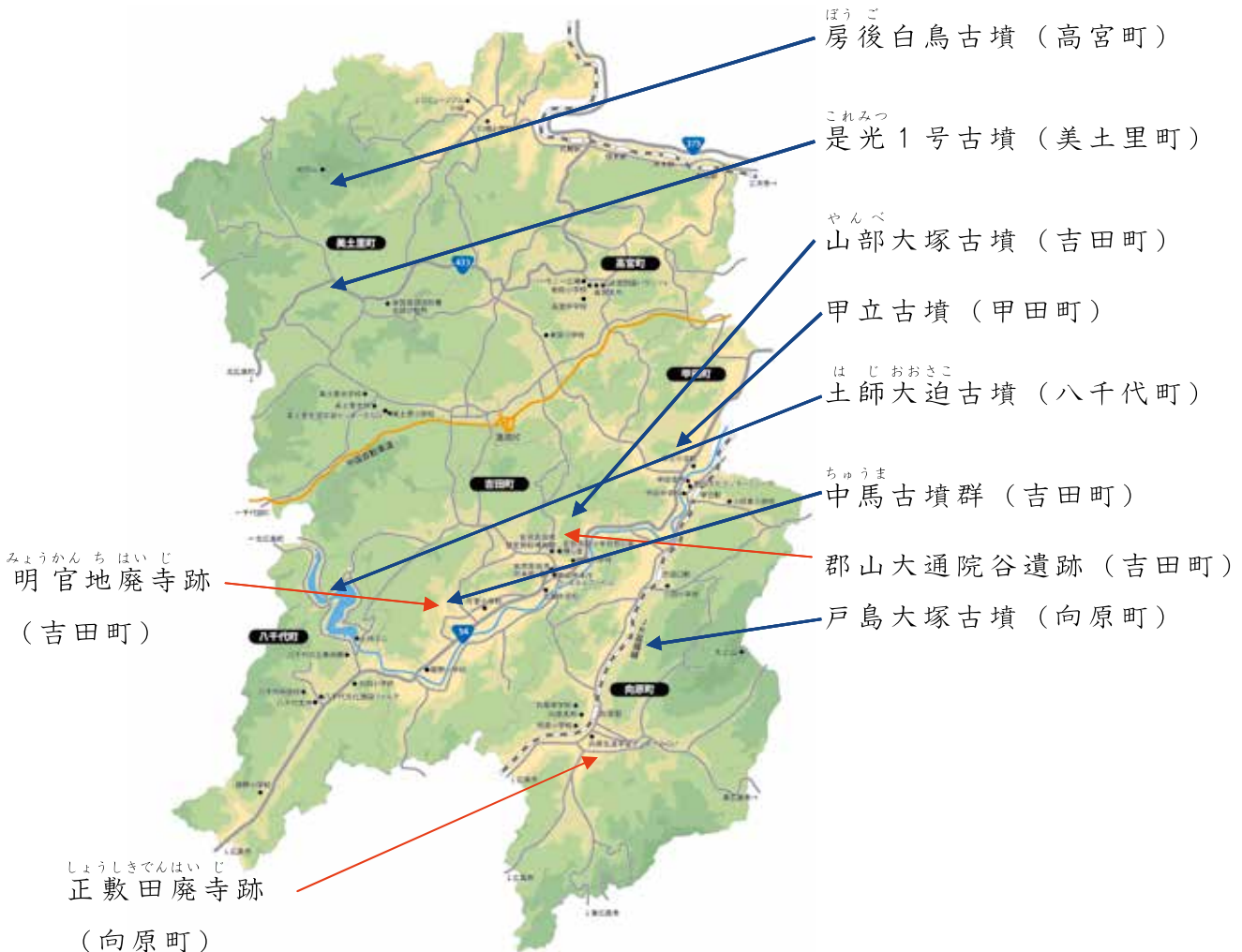


↑ みょうかんちはいじ 明官地廢寺跡
出土の文字瓦
広島県教育委員会

7世紀後半に創建されたという古代寺院跡である、吉田町 みょうかんちはいじ 明官地廢寺跡・向原町 しょうしきでんはいじ 正敷田廢寺跡などが確認されています。吉田町の中馬に、明官地廢寺は、江の川の支流である油川 あぶらかわ をのぞむ東斜面にあり、調査で塔や金堂（本堂）などの基礎部分も見つかっています。法隆寺の形式でもあるといわれており、朝廷や中央豪族の影響を受けていたと考えられています。つまり、仏教が国家宗教として、安芸高田市にも広められていました。

6 安芸高田市の主な古墳・古代遺跡分布図

安芸高田市の古代遺跡はたくさんあるんだね！身近な遺跡を訪ねてみよう！



第2章 武士の成長と安芸高田～平安時代末期から鎌倉時代～

1 中世高田郡・高宮郡の成立



●平安時代後期の高田郡・高宮郡はどのように変化していましたか。

平安時代後期，日本国中の多くの地域でみられたように，安芸国高田・高宮郡においても，土地が荘園や国衙（国の行政組織）の所領（土地）になっていました。現地にいる国司は国衙の支配を握り，中央政府（朝廷）に対して一定の税を送ることでよしとし，朝廷も国司による国衙の支配を黙認している状況になっていました。以後，国衙のもとに集まる在地の支配者が領主として，各地域の所領を地方の実力者を通じて，中央の貴族・寺社とのつながりを求めて寄進⁽¹⁾していくことで，多くの荘園が生まれていきました。

平安時代末に，誰が安芸高田を支配していたのだろうか？

2 高田郡・高宮郡内に成立した荘園・国衙領



●高田郡・高宮郡にはどのような荘園や国衙領があったのでしょうか。

祇園社⁽²⁾領安芸国吉田荘は，1149年祇園社の行事を営むために充てられたことで成立しました。鳥羽上皇の院政の頃に成立した荘園の一つで，本家を鳥羽上皇，領家を左大臣藤原家忠とする荘園でした。当初の領域は確かになっていませんが，のちに吉田荘四郷（吉田・麻原・豊島・竹原）を中心としつつ広大な領域になったと考えられています。

高田郡内七カ郷（三田・風早・豊島・麻原・甲立・船木・粟屋）や高宮郡は院政の頃を経て，荘園・公領（国衙領）のさまざまな呼び名で呼ばれる土地に変わっていきました。

3 中世への転換の中で



●土地の支配はどのように変わっていったのですか。

律令制度の国一郡一郷という地方行政組織は，11世紀に入ると，タテの関係から国衙の下にヨコに並ぶ関係として大きく変化していました。新たに台頭しつつあった在地領主⁽³⁾とよばれる支配層は，荒野あるいは荒廃していた公田を開発し，国衙から自らの支配する領域として認められようとする動きを見せました。それがかなわない場合，中央の権力者に寄進して荘園とすることによって，自らの所領を保とうとする動きを見せていたのです。

注 （1）寄進 自らの土地の所有権を上位の公家や寺社に譲る行為 多くの場合，譲った者はそのまま現地の実質の支配権を維持しようとした （2）祇園社 古くは祇園感神院といい，京都にある八坂神社の別称 （3）在地領主 農村を中心とした生産の場に根拠を持ち，現地を支配した中世の領主の呼称



↑ 高田郡・高宮郡の主な荘園・国衙領 (編集委員作)



← 清神社 (吉田町吉田)
(中世、京都祇園社の荘園の鎮守社であった)

安芸高田市にあったそれぞれの荘園・国衙領に関わる場所や地名を地図上で確かめてみよう。

4 平氏政権と巖島神社と安芸国衙の関係



●安芸国での平氏の動きはどうだったのですか。

平氏は平治の乱後に国政の中心にのぼっていく中、1166年から少なくとも1171年にかけて平清盛を知行国主⁽¹⁾とする平氏の安芸国衙支配が積極的にすすめられていました。

平氏は、1182年3月までに巖島神社の神主佐伯景弘を在国のまま安芸守にし、内乱が激しくなる中で国衙を支配しながら、体制を強めていきました。清盛が1160年8月に最初の巖島参詣を実施した後、平氏の巖島に対する信仰が高まり、その権力の保護のもとで、巖島社領の増加が見られました。



5 高田郡司藤原氏の動き



●高田郡の在地領主藤原氏はどのような存在でしたか。

高田郡司藤原氏は、平安時代後期より代々所領を相続していく中で、郡司や郷司が在地領主となっていた代表例として研究に取り上げられてきました。

旧来の在地領主の中での勢力の入れ替わりが起き、その政治的対立が激しくなるとともに、高田郡司藤原氏も対応を迫られていました。

年代	高田郡司藤原氏関係の動き	全国的な動き	
1114	・藤原頼成、嫡子成孝に三田郷の私領を譲ることを国司が承認	<p>この高田郡司藤原氏については、古くから研究がなされているようだよ。</p> 	
1139	・藤原成孝、中原師長(都の貴族)に三田・風早両郷の私領を譲ることで下司に補任されることを願うが失敗		
1151	・藤原成孝、養子源頼信に三田・風早両郷を譲る		
1167	・源頼信、平清盛の長寿を祈り、巖島社神主佐伯景弘に三田郷の田畑を支配の証明文書を譲る		
1174	・中原業長から高田郡七カ郷の田畠山林を巖島神社に寄進 ・佐伯景弘、高田郡七カ郷を巖島社領とするように申請を出す		1156 保元の乱 1159 平治の乱
1176	・安芸国司、高田郡七カ郷を巖島社領と認め、神主佐伯景弘をその地頭とする		1167 平清盛太政大臣になる
1180	・源頼信の子頼綱、佐伯景弘に三田・粟屋		この頃、法然が専修念仏を唱える
			<p>平氏と安芸高田の関係はどこにあるのだろう。</p> 

*注(1)知行国主 特定の国を事実上の支配国としてあたえられ、近親・近臣などをその国司に推挙し、国務にあたらせた者

1182	両郷の返還を求める <small>かげのぶ</small> ・佐伯景弘，嫡子景信に高田郡七カ郷を譲る	1180 源頼朝，伊豆で挙兵 1181 平清盛没 1184 <small>いちのたに</small> 一ノ谷合戦 1185 <small>やしま</small> 屋島合戦， <small>だんのうら</small> 壇ノ浦合戦
------	--	--

6 在地領主高田郡司藤原氏の没落と源平の争乱



●高田郡司藤原氏はどのように所領を守ろうとしたのでしょうか。

高田郡司藤原氏が中央の平清盛とのつながりを得ることで，高田郡七カ郷全体に対する領有権りょうゆうけんを取り戻そうとした動きを起こしていました。

しかし，1176年に高田郡七カ郷は巖島領として認められ，佐伯景弘には税を納める責任者である地頭じとうとされていました。藤原氏の後継者の頼信の子頼綱つなは佐伯景弘に対して，1180年9月，平清盛へのとりなしを頼み，証契しょうことなる文書を預け，有利になるようお願いしました。しかし，景弘は高田郡七カ郷を跡継ぎの景信かげのぶに代々伝える私領として譲っていました。こうして藤原氏の現地を支配する権利は奪われ，その名は歴史上から消えていったのです。

平氏と巖島神社（佐伯氏）とのつながりは，源平の争乱期には，反平氏の行動をとる在地領主を登場させることになり，安芸国での源氏軍の侵入と平氏の敗北という状況を生む要因となったと考えられています。

藤原氏のように，大きな権力の前に消えていった在地領主は他にもいたかもしれません。また，巖島神社とのつながりは，内陸部にある安芸高田においても，各地にある巖島神社かんげんさいや管弦祭といった行事にみられるように現在でもみることができます。



↑ 佐々井巖島神社（八千代町佐々井）



↑ 玉殿ぎよくでんの様子 扉の墨書ぼくしょに文安ぶんあん2（1445）年とある

7 土着の領主と東国武士

●鎌倉時代初期の安芸国の様子はどうだったのでしょうか。



平氏の没落によって、その地位を失った勢力がいる中で、鎌倉幕府は宗孝親を安芸国守護⁽¹⁾に送り込みました。宗氏は守護である上、朝廷の系統の国衙も掌握していました。また、高田郡内の巖島社領内部荘には以前からの領主の源姓の葉山氏が根強く勢力をもっていました。

1221年の承久の乱では、守護宗氏も葉山氏も共に朝廷方につき、その敗北の結果、幕府に所領を没収されました。このような安芸国内の没収地は東国武士に与えられたのです。

安芸国では、後に世能荒山荘が阿曾沼氏、安芸町村が平賀氏、大朝本荘が吉川氏、都宇・竹原両荘が小早川氏、三入荘が熊谷氏、八木村が香川氏に与えられました。

8 安芸高田に移った武士たち

●安芸高田に移ってきた武士にはどんな一族がいるのでしょうか。



次の武士の一族が安芸高田に移ってきた代表的なものです。

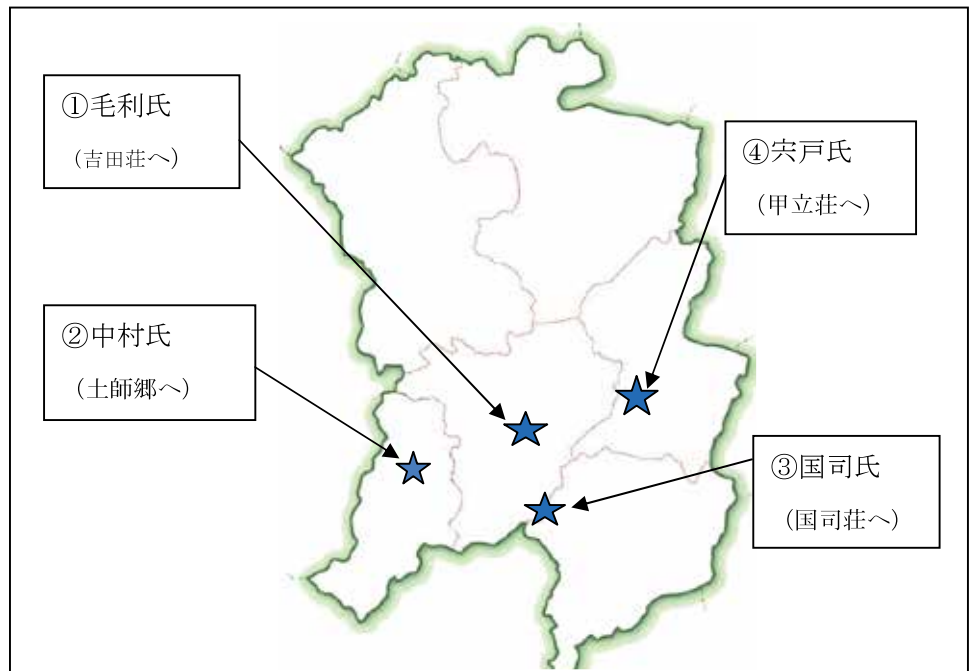
- ①毛利氏 鎌倉幕府初期の公文所（のちの政所）の別当、大江広元を祖とします。四男季光が毛利氏と称し、毛利荘（神奈川県厚木市北部から愛甲郡相川町）を領有していました。季光の孫時親は吉田荘を相続し、1336年7月に越後国から移りました。
- ②中村氏 源頼朝から駿河国地頭⁽²⁾職に任命された武田信義より4代信貞のとき甲斐中村荘（山梨県）に住んだため、その子兼邦から中村姓を名乗りました。兼邦の子兼貞は足利尊氏の下で軍功をたて、上土師・中土師・下土師（八千代町土師）を与えられ、1341年に土師郷へ移って来ました。
- ③国司氏 足利尊氏の執事であった高師泰を祖とし、その次男師武が1336年7月、六波羅合戦の功により尊氏から国司荘（吉田町国司）を与えられ移って来ました。
- ④宍戸氏 鎌倉幕府の有力御家人八田知家の四男家政が常陸国笠間郡宍戸荘に住み宍戸と名乗り、高田郡内の所領を伝えていました。家正から四代目知時の子持家の朝家が1334年甲立（甲田町上甲立）へ移って来ました。

東国武士たちは、鎌倉時代末から南北朝期にかけて移住し、動乱が激化する中で、直接に在地を支配して、自らの所領の維持を図ろうとしていたのです。

いろいろな武士の一族が広がりをみせているよ。



いよいよ毛利氏がでてきたよ。



↑東国武士の移住（編集委員作成）

9 毛利氏の吉田への移住

●毛利氏が吉田荘に来た頃の様子はどうだったのでしょうか。



南北朝時代の1336年、越後国佐橋荘（新潟県）の南条を本拠地にしていた毛利時親は吉田荘に入りました。時親は曾孫の元春とともに足利尊氏方として各地を転戦し、南朝方として活動する孫の親衡と戦っていました。その間、一時吉田荘地頭職を奪われることもありましたが。

この時、元春は母方の祖父、旧三田郷（広島市安佐北区白木町三田）の領主の系譜を引くとされる三田入道のもとに身を寄せたとされます。このように、新しく入ってきた武士は在地の領主との婚姻関係をつくることなどを通して、その在地の秩序に入り込んでいったとされています。

惣領⁽³⁾と庶家⁽⁴⁾、親子が相分かれて戦う動乱期の南北朝時代です。毛利氏のような東国から移住してきた武士の一族が、新たな秩序をつくっていく担い手となっていくと共に、広く在地とのつながりを深めていくことで、後の室町時代にかけて「安芸国人」とよばれる存在へとつながっていったのです。



南北朝時代の全国的な動きと安芸高田での動きを照らし合わせて考えよう。

（略系図）

毛利時親—貞親—親衡—元春

↑南北朝時代頃の毛利氏の略系図

*注 (1)守護 鎌倉・室町幕府の職名。任国内の軍事・警察権を主な権限とする。

(2)地頭 鎌倉・室町幕府の職名。主に下地の管理、租税徴収などを行い、後に在地において領主化がみられた。

(3)惣領 武家社会における一族の長。

(4)庶家 武家社会における惣領ではない家筋。

第3章 武士の成長と安芸高田 ～南北朝時代から戦国時代～

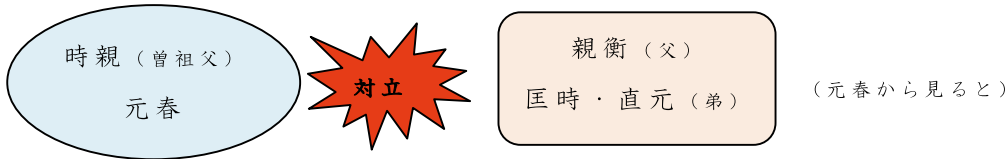
1 南北朝の動乱期から室町期における毛利氏の動き

●南北朝期から室町時代に向けては、移住してきた武士にとってどのような時期だったのでしょうか。



南北朝の動乱期は、武家にとってこれまでの惣領を中心とする一族の秩序から離れることもあり、周辺の領主とのつながりを深めた在地に新たな支配をめざす動きがみられる時期でした。

(南北朝期の毛利氏の四代にわたる分裂抗争)

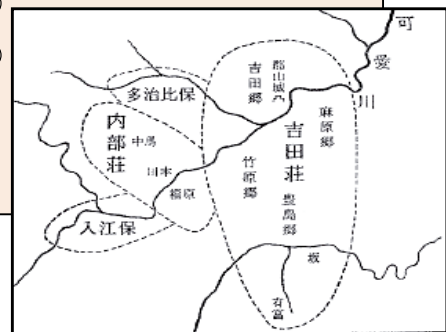
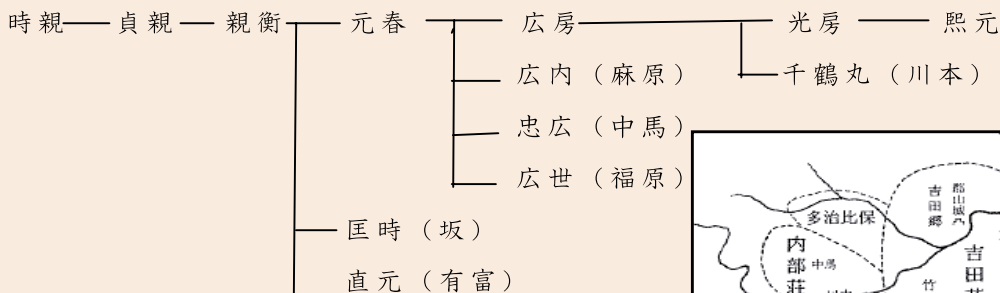


1381年元春の所領譲与による決着

- ① 跡継ぎの広房に吉田荘地頭職半分 直元の麻原郷地頭職を認める
- ② 吉田荘竹原郷を広房・広内・忠広・広世の四子に分け与える
- ③ 内部荘内福原村を広世に譲る

これらにより、新惣領としての^{ひろふさ}広房と^{おぼら}麻原・^{ふくばら}福原・^{ちゅうま}中馬・^{かわもと}河本・^{さか}坂といった在地名を名乗る庶家という室町期の毛利氏の基本が形成されたこととなります。しかし、惣領家と有力庶家との間に所領の高に大きな差がなかったことから、一族の分裂が生じる可能性をもっていたのです。

また、毛利氏をはじめとする安芸国に移ってきた武士団の動きは、旧来の^は生え抜きの在地領主との対抗関係の中で、在地領主のこれまでの支配を認め、所領の管理を保証するなどの形で実現していました。このように南北朝期以後はその重要な時期であり、安芸高田に根づくための工夫が必要だったのです。



↑毛利氏略系図

毛利氏の所領→

(『安芸毛利一族』河合正治著 吉川弘文館より)

2 安芸国人一揆の形成

●安芸国人一揆とは何ですか。



安芸高田の有力な国人の動きがわかるよ。



国人一揆とは、国人⁽¹⁾と呼ばれた在地の領主たちの血縁や地縁に基づいてつながる組織をいいます。

14世紀末、周防国・長門国（山口県）の守護大内氏は、安芸にも勢力を拡大して安芸国守護武田氏を圧迫し、奪った領地の一部を安芸の国人にあたえるなど大きな影響力をもっていました。

1403年に山名氏が安芸守護に任命されると、かつて大内氏から与えられた所領を没収されることを恐れた安芸の国人たちは山名氏に抵抗する動きをみせたのです。幕府の支持を得ている山名軍は有力国人の一人である平賀氏（東広島市の国人）を攻めましたが、国人の多くは平賀氏を支援しました。そして、毛利氏・宍戸氏などの国人33人が、1404年9月に結んだのが5か条から成る「安芸国人一揆契状⁽²⁾」でした。これによると、理由なく本領を奪われた場合には一同で訴えること、国に課せられた負担については一揆衆でよく話し合うこと、一揆衆内で相論⁽³⁾があった場合はよく話し合い、道理のある者に加担することなど、国人内の秩序を第一としていました。

この国人一揆を形成した土台は、在地での国人身分に属するものとしての連帯感によるものであり、その後、相互に起きる相論を自らで解決しようとする秩序をつくるものになっていきました。1419年の段階でも、毛利の惣領である熙元・福原広世と他の庶子家との紛争解決にあたって、周辺の国人の高橋氏（島根県邑智郡・美土里町あたりの国人）・宍戸氏（甲田町あたりの国人）・平賀氏の3名が連合して調停し、その調停を守る側を3名が支援することを双方に契約している例もみられます。

こうして、幕府・守護の介入にもかかわらず、在地における国人領主の相互に協力していく地域的結合として、境目を生きる国人領主の姿を示していたのです。

室町時代の中国地方の守護大名の勢力図の中に、安芸国の国人の名前や位置を加えてみよう。

歴代毛利氏墓所→

（吉田での初代毛利時親から第8代豊元までの合墓）（吉田町吉田）



*注(1)国人 南北朝・室町・戦国時代を通じ、地頭・荘官・有力名主級の在地領主の一般的呼称。

(2)契状 中世古文書の様式の一つで、将来の行為を契約した文書。

(3)相論 中世において、訴訟によって争うこと。

3 毛利元就の登場

●毛利元就が登場する頃の様子はどうだったのですか。



元就もとなりが登場する以前から、安芸や石見の国人領主は難しい立場におかれていました。この頃、幕府とは距離をおき、九州北部も領地に加え、貿易による経済力を基に力を強めた大内氏と山陰を支配する尼子氏との境目に安芸・石見両国の国人領主は存在していました。この国人領主たちは、大内・尼子の両勢力に相分かれての抗争の中から、次第に地域意識に目覚め、協調して、大内氏や幕府からの諸要求に対して国人領主として結束して対応するよう、自らの手による地域の秩序の形成をすすめていました。

毛利元就は、1497年毛利弘元ひろもとの次男として生まれました。元就は松寿丸と呼ばれ、家督かどくを譲って引退した父弘元に伴われて、多治比猿掛城たじひさるかけじょうに移り、成人後は「多治比殿」と呼ばれていました。元就の「元」の一字は兄興元おきもとから与えられたものであり、兄に従う元就の立場は毛利家の脇を固める存在として登場しました。しかし、兄興元とその子幸松丸こうまつまるが相次いで死去したため、1523年に郡山に入城して、毛利家の家督かどくを相続しました。



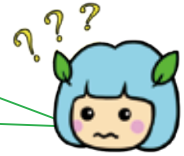
↑ 毛利元就像
(個人蔵)

4 国人領主から戦国大名へ

●毛利元就はどうやって勢力を伸ばしたのでしょうか。

国人領主の連合の盟主めいしゅとしての地位を占めていたのは、安芸と石見の中間に位置していた高橋氏たかはしであり、当初毛利氏の勢力をしのぐものでした。1529年(1530年とも)、高橋氏が大内氏おおうちに背いて尼子氏についたため、元就は、大内氏らと共に高橋氏の居城松尾城まつおじょう(美土里町)を攻め落とし滅ぼします。高橋氏の滅亡後、その旧領の内、上下荘よししげ(吉茂上荘・下荘)、阿須那、船木、佐々部などが元就に与えられることにより、毛利氏は石見国東南部にまで大きく勢力を拡大するとともに、国人領主の主導者的立場を手に入れました。そして、元就は近隣の宍戸氏ししどとの関係を深め、1540年9月から翌年正月にかけて尼子氏の大軍が吉田の毛利氏を攻撃した、いわゆる「郡山合戦」でこれを撃退し、同時に安芸守護武田氏とうめつも討滅しました。その後、1544年に元就は三男隆景たかかげを小早川家こばやかわに入れ、また、1550年には二男元春もとるに吉川家きっかわを相続させました。これらによって、吉川氏を通して出雲・石見の国人とのつながりを確かにし、小早川氏こばやかわを通して瀬戸内海の海上勢力との結びつきを強めました。

安芸高田の中世の信仰を示す文化財を紹介します。



6 中世安芸高田の信仰

●安芸高田の中世の信仰を示す文化財にはどのようなものがあるのでしょうか。

安芸高田市内には、中世の人々の信仰を示す、多くの社寺をはじめとする建築物および奉納品などの文化財が現存しています。毛利氏に関連したものが多くある反面、当時の民衆の信仰を具体的に示すものは多くありません。しかし、戦乱が多かった中世という時代の中に、その時々の人々の願いを想像することができます。

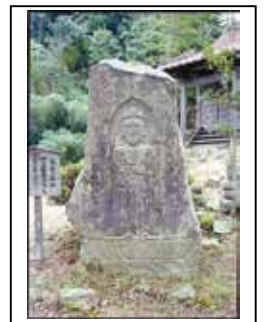
(1) 峠山八幡神社板碑 (吉田町中馬)

板碑は、供養のために建立した塔(塔婆)の一つの形式で、その形が板状であることからそのように呼ばれています。峠山八幡神社の板碑は、その特色として頂上に「山形」があり、供養の対象になる梵字(1)は金剛界大日バンを示しています。「応永十年五月(1403年)」の銘があることから、大日を供養尊として、室町時代初期に建立された板碑であることがわかります。自然石に少しの整形を加えた美しいふくらみ具合を感じることができます。



(2) 浮彫来迎阿弥陀像 (吉田町中馬)

通称「天正の石仏」として、地元で親しまれています。「来迎阿弥陀如来」(死後浄土に生まれることを願う人の臨終に西方極楽浄土からこの世に現れる阿弥陀如来)を中央に本像として浮彫にされています。その本像の両脇には、「天正拾六年(1588年)」、「為月高周台也」と彫られています。地方の石工による本像は親しみやすさや力強さを感じさせます。



(3) 高林坊の銅鐘 (甲田町高田原)

1383年、豊後国(大分県)から五龍城(甲田町上甲立)の陣鐘として移され、宍戸氏が防長へ移った際、高林坊に寄進されたものといわれています。高林坊は1496年甲田町上甲立に僧浄誓が開き、その後慶長年間(1596~1614年)に現在地へ移転しました。その時造られた庭園が、「慶長の庭」で市名勝に指定されています。



(4) ^{あひみ} 鍙石 (吉田町相合 宮崎神社)

毛利氏が吉田荘に下向してまもない南北朝時代・観応元(1350)年に、毛利師親(元春)は高師泰に従軍し石見国(現島根県)での合戦に臨みました。その時、江の川を馬で渡ろうとした際、同じ小石が三度鍙に引っかけ、その石を^{ふところ}懐に抱き戦ったところ、多くの戦功を得たといひます。

この石を神体として祀ったのが宮崎神社で、毛利氏の氏神社となりました。この石は「鍙石」と呼ばれ、後にこの石をかたどったあんこ餅^{もち}を毛利家中で食べる風習として伝わり、現在では「川通り餅^{もち}」の名で知られています。



(5) ^{むなふだ} 棟札 (吉田町吉田 ^{すが} 清神社)

棟札^{むなふだ}とは、社寺などの建物の棟^{むね}上げや修理の時に、建造の年月日や施主^{せしゅ}・大工・祈願文などを記し、棟木^{むなぎ}などに打ち付けられた板札のことで、安芸高田市内には、中世の棟札24枚が残されています。特に、清神社の棟札は1325年のものが最古で、1694年までのもの16枚が存在しています。同社の棟札では1400年以降の10枚には郡山城主である毛利氏当主の名が記されています。



(6) ^{きょうそう} 鏡像・懸仏 (吉田町相合 宮崎神社)

鏡像は古来より神がよりつくものとして考えられた銅鏡に、主に線刻または墨画によって神仏を表したものです。懸仏は線刻の鏡像からより立体的な像を表現し、垂れ下げて礼拝するようになったものです。宮崎神社の鏡像は、中国製の湖州鏡に仏像を線刻したもので平安時代末期のもので、懸^{かけ}仏(仏像部分)は、鎌倉時代にさかのぼることのできる作とされています。この他にも、中山神社(吉田町桂)・野部八幡神社(高宮町佐々部)や宮地山神社(高宮町来女木)等でも、懸^{かけ}仏が見つかっています。



いずれも安芸高田の中世の宝といえるものです



*注 (1)梵字 梵語(サンスクリット)を表すのに用いる文字で、日本では真言密教で重視され、シンボルに用いられる。(2)勧請 もとの寺社から神仏の分霊を迎えて祭ること。

(3)氏神 本来は同族の者のみが祭ることができる神とされていた。後には、地縁的な神に変わっていき、人々が生まれた土地に鎮座する神とみなされるようになった。